㈣ 佐伯藩とみかん

鶴藩略史によれば、佐伯藩六代高慶公の時、享保十四年（一七二九）十月、津久見村初めて蜜柑を献ず。公これを高祖養賢公の廟に薦む。初め養賢公佐伯に就封、各〻其地理に因って樹芸を勧む。特に津久見の地は柑橘に適するをもって、村民をして之を栽培せしむ。其業漸く盛んとなり、公に至り益々之を奨励し、四山果樹ならざるの地なし。産額頗に進み、遍く四方に販し、歳収巨利を。これにより年々この献あり。――とある。

旧藩時代、津久見・四浦・保戸島（今の津久見市の大部）は、佐伯藩領たりしも、明治十一年海部郡が南・北に分轄された際北海部に編入された。津久見みかんの名声は高かったが、この文献によると、津久見みかんというより、むしろ佐伯みかんと云ったら、さぞ津久見の人が怒るであろうが……。

慶長十一年正月、藩主高政公は一百姓の屋敷まわりにて、山桃の木・柿・梅の木・梨の木など、材木にも薪にも一切きり申しまじく事

とおふれを出している。

しかし、寛保二年（一七四二）十一月、藩主毛利高丘公領内全般に頒布した「五人組帳」の中には除かれているようだ。同おふれは全文四十六条あって、かなり詳細にわたっているが、この禁伐のことは除かれている、その理由はわからない。

高政公は家のまわりになり木（果樹）を植えさせ、またこれを伐らせぬように命じたのである。

私たちの町や村にある橙や、みかん・びわ・夏みかん・九年母・金柑・梅・梨・柿等も、その保護をうけたのである。屋敷まわりのみでなく、農民所有の畑のかくらの中にも、大ていの農家はかなりみかんの類も所有していて、正月のおかざりや、いわしの酢のものの調理用や、農繁期に畑の隅にそそり立つこれらの果物の恩恵をうけ、大人は渇いたのどをうるおし、子供たちはこれを唯一のたのしみとして耕地に足を向けたものである。

前記の果樹のほかに柚・山桃などがあって、特に藩は町の旧下入津地区、高山海岸の県道付近に山桃が多く、梅雨前後のさつまいも植付けごろ、採取して売りに来るのを、挙って買っていたことを記憶する。特に密柑の類は、橘・枳・九年母・小みかんといって、薬師如来正月八日の縁日に、村ではかり売りして、かわいいみかんは珍重せられた。だいだいなど、日常生活に欠かせないものであった。

（おことわり）小野氏の「みかん雑話」は、なお延々とつづく。大献の渉猟、諸博、比較照合も行き届き原稿紙八〇枚に及ぶほどの大きさで、限られた紙面にはその半分も載せることは出来ない。そこで以上、郷土に直接つながりある部分だけを掲げ、大部分は割愛した。諒とされたい。（編集者）

紹介

黒澤東光庵

青山黒沢・会員　山崎　作一

東光庵は堅田川の上流、黒沢の中程の山腹にあって、二十数段の石段を上る小高い所、前には清い小川が流れ、境内には有名な桜があり、もろもろの古塔が立ち並んでいて、春夏秋冬色とりどりの花が咲きつづけている。こ

の境内からは、黒沢の山野がほとんど一望のうちに眺められる。

この庵は、臨済宗妙心寺派に属し、養賢寺の末庵で、医王山東光庵と呼び、本尊薬師如来をまつっている。今から三百六十年ほど前の元和二年二月十五日、黒沢村汐月嘉衛門の創建と伝えられ、当時は谷向いの古庵と呼ばれている所にあったといわれている。当時の汐月家は黒沢の六軒株といわれていた最も古い家柄であった。その後、村中が佐伯の殿様毛利家の菩提寺である養賢寺の檀徒になったが、どうしてそうなったかはつまびらかでない。

其の後、延享年間養賢寺住職匡山和尚によって、現在地に東光庵が営なまれ、今日まで幾代かの住職が法燈を守りつづけ、その中には蘭菴英和尚や、近くは金田和尚の様に、地元の人達に今なお尊敬されている方がある。

現在の庵は明治五年頃の建築で、もう百年を越している。

この東光庵で有名なのが庭先の二本の塩釜桜（彼岸桜）で、匡山和尚が開山された頃からあったものと思われる。旧藩の頃は毛利の殿様が花見に来られたとか、明治十年十年の西南の役には、官軍の将兵が戦陣のなぐさめに花見をされたとか、また明治の文学者国木田独歩先生が、佐伯在住のみぎり生徒と共に花見にやって来たとか、虚実とりまぜての伝承がある。とにかく昔はとくに花見客で賑わった由である。当時から桜は二本であって、庵に向って左の桜が幹回りが一丈八尺、右の一本が一丈三尺、高さは十丈余もあったといわれていて、満開の時は大きな東光庵の建物も花にかくれて見えない程で、その眺めはまことに壮観であったという。しかし惜しいことに明治の末期と、大正の初めの台風に倒れてしまった。

しかし村人たちが手をつくして起こし、今はその株からの芽生えが繁茂して、毎年春の彼岸ごろには、とても美しい花を咲かせて居る。

以上が東光庵についての沿革の紹介であるが、何分研究に浅い筆者で、事実を外れているところもあろう。お ゆるがいただけたら幸いである。

（おわり）

大阪短信

長谷川　等

桃花塾岩崎先生のこと、洵に有難く拝読しております。出来れば「岩崎先生と山田俊卿先生」との関係も追録賜わらば幸甚に存じます。

山田俊卿先生は、私が親しくご指導をうけた方ですが、私の祖父箕川長兵衛を「命の恩人」と思って頂いて、年令的には孫のように私を特にお世話下さいました。

私は上阪してすぐに山田俊卿先生をお訪ねしました。そのうちに、岩崎先生と私の関係が生じたのでした。

山田先生ー岩崎先生と、二人の郷土の大先輩のお供い方お二人に私は可愛がられて大阪人になりました。多分山田先のお葬式の時に、追悼の乱を岩崎先生が捧読した筈です。山田先生のお孫さん達も、今はどこにおられるか、岩崎乾一氏なら知っておられるでしょう。

それから、私の佐伯中学同期生で林巷夫君があります。佐伯の人で、この人の晩年を知っている方は少ないと思います。

関西学院を出てアメリカのフーバー大学を二番（一番はアメリカ人）で卒業し、第一次上海事変直后日本にかえりましたが、日本内地では当時彼を容れる処なく、終に近衛さんのお世話で、東亜同文書院教授となり、近衛さんの私設スパイ（良い意味の）として、また日支の若い人達の指手を生涯の仕事として活躍していたが、惜しい事に終戦直後上海で病没しました。（後略）